

紫式部日記における生活と文体

森 一 郎

一

紫式部日記がいかなる動機によつて書かれたものか、その成立の事情は明らかでないが、仮名の御産部類記的な性格を有することは日記の部分の本來的な動機をうかがわせるに十分である。すなわち、敦成親王誕生という一大盛事を観察記録することに本来の目的があつたはずである。ところが、式部の本來的な資質がこれを単なる観察記録たらしめなかつたのであろうか、日記は冒頭から彼女一個の身の上に胚胎する感懐をもつて書き起こされているのである。(首欠部分があるとかないとかの論はここでは一応無関係である。冒頭ということを書きほど強い意味で申しているのではない。)

「秋のけはひの立つままに」にはじまる土御門殿の描写は、「不絶の御説経の声々、あはれまさりけり」、「御前にも、近うさぶらふ人々はかなき物語するを聞てしめしつ、なやましうおはしますすべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり」など、御出産のための御修法と、中宮彰子の点描を軸にしており、まさしく敦成親王誕生記の書き出しにふさわしい。にもかかわらず、「うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき」と、自己

の身の上の感懐をもつて文を結んでいることは、この日記のいわゆる随想性をさし示すものとして注目すべき徴証でなければならぬ。

日記が冒頭から式部の一個の身の上に胚胎する感懐をもつて書き起こされていることは、この日記の内面的な本性が式部の身の上の日記といつた点にあるのではないか、ということを考えさせるのである。

冒頭につづく女郎花をめぐる道長との贈答など、明らかに彼女の身の上に関することである。また、つづいて述べられている殿の三位頼通のことは、前の女郎花のことから「女郎花おほかる野べに」とうちずんじた頼通が連想的に回想されたと見られるが、これも若宮誕生記そのものではない。つづく播磨守の恭のまげわざ、上達部、殿上人たちの宿直の有様、宰相の君の風寝姿、倫子から菊のきせ綿を贈られた記事など、全く御誕生記には関係なく、あとの二つなどは式部の身の上と間接的、直接的に関係することからである。

出産に関する行事があまりなかつたから、自由なる回想のままにその頃のことをしるしたのであろうが、若宮誕生記が、言われるように、もし、道長からの下命によつて観察記録されたとすれば、

これは、相当に自由な記録態度であつたと言わねばならないであろう。

敦成親王誕生記が、誕生記という性格に即して書かれるのは、御誕生前後、九月十日から十九日までの記事で、そこではまさに忠実に誕生記がものさされていると言つてよい。

ところでしかし、その観察記録の眼目は、御出産をめぐる人々の表情にある。人間群像のすがたである。ものけ調伏の有様など追真的だが、それにもまして次の描写など作者の見事なタッチである。

例の渡殿より見れば、妻戸の前に、宮の大夫、春宮の大夫など、さらぬ上達部もさぶらひ給ふ。殿いでさせ給ひて、日ごろうづもれつる置水つくるはせ給ひ、人々の御けしきども心地よげなり。

心のうちに思ふことあらむ人も、ただいまはまきれぬべき世のけはひなるうちにも、宮の大夫、ことさらにも笑みほこり給はねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色にいづるぞことわりなる。

右の宰相の中將は、権中納言とたはぶれして、対の簀子にぬ給へり。

道長や中宮大夫の内心の喜びの表情の見事な把握がなされている。右の宰相の中將と権中納言のたわぶれにも彼等の喜びを看取している式部の眼が光っているわけである。

若宮誕生記は外界の記述であつて彼女の身の上の感懐記ではない。しかし、それをしも御誕生をめぐる人々の心のすがたに視点を定めたということには何ほどかの注意がはらわれねばなるまい。すなわち、外界の客観的に正確な観察記録であるよりはもつと自由で主體的な観察記録であつたことに注意したいのである。「人の呼べば、つばねにおりて、しばしと思ひしかど、寝にけり」などという叙

述からは、生命を帯びた観察記録者の拘束されたきゅうくつきさは感じられない。わりに自由な観察記録の態度がうかがえるのである。

御誕生記を主想としつつも、それをめぐつてさまざまのことを、思ひのおもむくまに書きつづつていくのであり、さればこそ、池の水鳥を見ての感懐や、小少將の君との歌の贈答など、身の上の感懐記がきわめて自然にもなされているのであらう。

紫式部日記の理想が本来若宮御誕生記であると考えられるにかわらず、冒頭からもう彼女の身の上の感懐が発想され、以下、相当に彼女の自由な発想において誕生記自体がつづられていくということは、この日記全体に自在に発想されている随想的諸段の必然性をさし示すものにほかならなかつたのである。

二

さて、ここでふたたび冒頭の文章に立ちかえりたい。

「うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき」という感懐が、この日記の随想性をつとに発想するものであり、この日記の本性にかかわるものであることが考えられるわけであるが、この感懐の表現性をここで問題にしたいのである。「うつし心をばひきたがへ」という「ひきたがへ」と言つたとき、それは、「かかると御前をこそたづねまゐるべかりけれ」という中宮讚歎の気持をいうことになるのだが、その一方では「うつし心」という想念が、作者の心裡に胚胎していることをも示しているのである。それはここで否定されつつ、内在する気持として、わたくしたちの想いを誘わずにおかない。「よろづ忘るる」も同様である。

「忘るる」と言つたとき、讚歎の情をいうわけなのだが、一方で「よろづ」の世界があるということが表わされているのである。「かつはあやしき」と、一方では不可思議に思つゝVというのも、そうした「うつし心」、「よろづ」の現実があるからにはかならないのである。

そもそも「うき世のなぐさめには」といつたときに既に作者の心裡には「うき世」が想念されていたわけである。もとより、それらが忘却されるほどであるというのが、文の主意であり、表現意図ではあるが、否定された世界が言われることによつて、内在する世界として隠見するのであり、「かつはあやしき」と結んだときには、むしろその内在する世界が表に出ているのであるといわねばならぬのである。

ところで、この「うつし心」「よろづ」という言葉の内在する具体的世界、「あやしき」という感懐の具体性は、これらの表現それ自体としては明らかでなく、具体的なものはおしつまつまれていると言わなければならない。

「うつし心をはひきたがへ」「うつし心」というのは具体的にどういう心であつたのだろうか。また「よろづ忘るる」とある「よろづ」とはどのような具体的内容を包蔵しているのであるか。そして「かつはあやしき」と言つた「あやしき」とはどういうことなのか。

土御門殿の優艶たる情趣、中宮への讚歎の文章がまことに具体的な描写をとげているのに反し、この感懐を言ひ表わす文章は、具体的な想念の世界を表現の奥にひそめている。が、にもかかわらず、かえつてこの主観的な表現に強ひきつけられるのはどうしたわけ

であろうか。

この表現が、単独にそれ自体として発想・表白された感懐ではなく、土御門殿の情趣美、中宮への讚歎を叙した具体的な表現に相接していることに注意したい。

土御門殿の優艶たる情趣への陶醉と、中宮への讚歎にわれをも忘れる心地とはうらはらの、それらの心情をまるでささぎるかのようにもたげてくる「よろづ」の想念、それに悩まされる式部の「うつし心」である、という具体的輪郭は明らかなのである。

「うき世のなぐさめには」、「うつし心をはひきたがへ」、「よろづ忘るる」における——との關係はすべて一連のものである。

——を——が否定することによつて讚歎の情を表わしている。しかるがゆえに、「うき世」、「うつし心」、「よろづ」は相関する世界である。

そうした式部の生の暗い現実の世界、内在する世界に、わたくしたちの心が強くひきつけられるわけであろう。

それは、具体的なものがひめられていることによつてかえつて具体的なものを想わしめずにおかない、パワドレシヤル逆説的な文体構造のもたらす誘引力と言ふべきである。

この「うつし心」というのは、一条天皇の行幸を待つ土御門殿を叙した「行幸ちかくなりぬとて」のところの「ただ思ひかけたりし心の引くかたのみつよくて」とある「思ひかけたりし心」と重なるものであらうと思う。「思ひかけたりし心」は、日本古典文学大系の頭註などのしるすとおり、従來の出家の願いと決めてしまふ通説には従えず、「心に常にかかっている憂鬱」といふべきものであ

ろう。もとよりそれは出家の願いへとつながっていくべき心ではあるが、現実、「よろづ」の想念に悩まされている憂愁の心、すなわち「うつし心」であると考えられる。「ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまざるぞ、いとくるしき。いかで、いまはなほ物忘れしなむ………」とつづく文章によってそのことは察せられる。すなわち、心に常にかかる憂愁が強くて、「ものうく」なのであり、「思はずに、なげかしきことのまざる」のであり、それが「いとくるしき」なのである。そうして、どうかして（「いかで」）、よろづのわずらい、心にかかる憂愁を「物忘れしなむ」といふ願いとなり、それらのわずらいの「思ひがひもない」ことが反省せられ、思いがひもないわずらいに悩むことの「罪もふかい」ことが目覚むる心にも思いとなつて自覚せられ（「明けたてばうちながめて」）、例の水鳥の歌「水鳥を水のうへとやよそに見むわれも浮きたる世をすぐしつ」へと感懐は高まり、「浮きたる世」をすぐす現在の不安な生活がかえりみられているのである。

さて、注意すべきは、この文章もまた具体性を内にひめていくということである。そして、ここでもまた、具体的なものかひめられていくことによって、かえって具体的なものを想わしめずにおかない文体の誘引力が、わたくしたちをひきつけてはなさないののである。「思ひかけたりし心」を出家の願いとする従來の通説にしても、式部の生活の具体的世界を想いやることによって考えられた見解なのであった。

これらの具体的でない表現には、式部の心に内在する具体的世界が、無限におしつつまれ、はてしもなくひろがっていたのだと考

られるであらう。

誘引されるままに、わたくしも、その式部の内在する具体的世界をつきとめたいと思う。彼女が「うき世」といい、「うつし心」、「思ひかけたりし心」という心の世界、「よろづ」の現実を解明したいと思う。

三

もとより、式部の人生の、幸福とはいえない生涯のくまぐまが、彼女をなやます「よろづ」の想念となつているにはちがいないが、弊式部日記による限り、彼女の宮仕え生活に対するうち消しがたい憂うつ、不満、違和感が注目されねばならぬであらう。

弊式部が宮仕えをいやがっていたことはよく知られている。女房というものが、男性と常々接渉しなくてはならない職能ということとで、一種のホステスのな性格を一面有していることなど、式部としては最もいやがったことらしい。

五節の舞姫が顔を見られながら歩むさまを見て、「ひとのうへとのみおほえず」としている。また、童女御覽の日の記事で、「目に見ずあさましきものは、人の心なり。されば、いまより後のおもなさは、ただなれになれすぎ、ひたおもてにならむもやすしかしと、身のありさまの夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさえ思ひかかりて、ゆゆしくおほゆれば、目とまるとも例のなかりけり」と、自分もやがては男の中に顔をさらしても平気になつていくのではないかと、自分の運命にぼうぜんと目くらみ立ちつくむような、みじめな思いにとぎされている。

既に阿部秋生博士の御指摘もあるように、^註道長が、式部の渡殿の局の戸をたたいた時の式部の歌に「あけてはいかにくやしからまし」というのも、「召人」となってしまうねばならぬ宮仕え女房のみじめさを知っていたかうであつた。

寛弘五年九月十九日の条の「こまのおもとといふ人の恥見待りし夜なり」とある「こまのおもと」なる女房の恥とは、益田勝美氏や秋山處氏の研究で具体的事情とその意義が明らかにされているごとく、公卿たちに酒を飲まされ酔わされて、くだをまくようなことをした失態をさしているのであつた。秋山氏が言われているとおり、この女房の恥を、式部は、同じ宮仕え女房として、わが恥として強く心にやきつけたのである。

後宮の口うるさき、わずらわしさが、彼女を宮仕え嫌悪におとしいたであらうことも紫式部日記の各所にうかがわれる。清水好子氏は諸例を日記中よりあげて鋭く式部の後宮生活を浮彫りされ、わたくしも紫式部の宮仕え生活のすがたの追求を最近の拙稿で^註試み、後宮の口うるさき、わずらわしさを、俗っぽさに、式部のアリケートな神経がいかにいらだたせられ、いかに彼女が孤愁の情においつめられたかを追求した。

四

が、しかし、そうした個々の女房たちの口うるさき、俗っぽさもさることながら、そうした女房たちの生活圏としての彰子の後宮の気風そのものへの不満、批判の心をいだいでいたことを、よりいっそ

う重視したいと思う。そのことを、わたくしは、いわゆる消息文体といわれる部分の、齋院の中将の君の書簡を組上にのせて齋院方にはげしく反撥する式部の文章によって論述したのであつた。わたくしは、この文章を、中宮弁護の文章とは見ないのであつて、はつきり中宮批判の文章と解するのである。

それを述べるために、本稿では、文章の展開に即して分析を試みたいと思うが、その前に、さきの拙稿で述べた論旨にあたる部分を引用することをゆるされたい。

「紫式部は、齋院の中将の君の書簡を組上にのせて、齋院方に対してはげしく、反撥するが、どうも負け犬がほえているようで、だんだんその筆は齋院の長所をうべない、中宮方の短所を認めるはこびになつていく。

これを紫式部の自己批判性、中宮方の欠点をも認める公正な態度、人間理解の客観性、周到性等々、物語作家の偉大性と結びつけて紫式部の人間像を称揚するのが一般のようである。

それらの式部の偉大性自体を否定するわけではない。が、この文章が、齋院の中将の君の書簡を組上に齋院方にはげしく反撥するかまえてありながら、結局、中宮方の批判へと帰結するのは、式部のほんとうの意図が、中宮の後宮の批判にあつたのだと考えられないだろうか。それは、式部の自己批判でも何でもなくて、おさえがたい不満をうちまけた文章なのではないか。わたくしは、そう読むのが、この文章構成に即した自然な受け取りかたではないかと思うのである。

齋院方を批判するのはそのための導入なのである。あえて言つてしまえば「敵は本能寺」なのである。齋院方を批判するのはひとつ

の文体のかまえにすぎない、いわば方便なのだ、と言つては言い過ぎになるであらうか。」

長い引用で恐縮である。

原文は、まことに屈折した頓晦的な文体であつて、そのため、まざまの解釈を讀む者に生じさせるようである。が、今のところ、わたくしは、わたくしの読みとりかたを、確乎として主張したい氣がしている。

さて、文章の展開に即して考えてみよう。

まず冒頭「齋院に、中将の君といふ人侍るなり」と、齋院の中将の君なる人物を拉し來たつて、その書簡の内容が氣にくわぬと公憤をうちまけてゐる。

ここで注意すべきは、「いとこそ艶に、われのみ世にはものものゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ。すべて世の人は心も肝も無きやうに思ひて侍るべかめる」という文が、人物批評ではなくてあくまで書簡の内容が氣にくわぬ、ということが言われているのである。「(書簡を)みそかに人とりて見せはべりし」に相接して、「思ひてはべるべかめる」という推量形をとる表現は、書簡の内容による推定であることを明確に示している。しかも、つづけて、なお「見はべりし」とくりかえしている。書簡が組上にあるということ、より明確に言えば、齋院の中将その人が組上にあるのではないということである。「文書きにもあれ、歌などのをかしからむは、わが院よりほか誰か見しり給ふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひいでば、わが院こそ御覧じ知るべけれ」などぞ侍る」と、わざわざ書簡の内容を示していることで事情はいっそう明白である。そして実は、その書簡の内容を提示することが、式部の当面意圖したところなのであつて、その齋院礼讃の言辞を提示することによって、式部の公憤を

読者にもつともなることとして印象づけようとしたのである。ここに、式部の立場は読者に対して確乎たるたてまえを確立する。

さて、「見侍りしに、すずるに心やましよう、おほやげばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくくこそ思ふ給へられしか」とは、まことに激しい調子であるから、当然のごとく、必然の筆緻をもつて、式部は反撃の筆をとるであらうことを予想させるのである。ところが、つづく文章はどうであらう。まことに歯切れのわるい、妙に屈折した文章が展開するのである。もちろん、反撃の文章ではあるのだが、それは、最初から「げにことわりなれど」と、中将の書簡の内容、すなわち齋院礼讃を是認し、肯定してかかるではないか。そして反撃の筆は、齋院方の女房へ向けられ、齋院という環境はむしろ式部自身が称揚してかかるのである。これでは、中将の君の書簡内容を否定しているというよりは、むしろ是認しているといつてよいのである。双方の女房比較において中宮方もちあげつつ、かえつて、齋院およびその環境の風流と中宮御所のものさわがしい環境とを対比し、私のようなものでも齋院でならば「なまめきならひはべりなむをや」と浮き立つようなことまで言い及んでゐる。花鳥風月の風流ばかりではない。男女の艶情をも生む風雅の基盤があるというのである。言うならば、すぐれて文学的環境なのである。「埋れ木を折り入れたる心ばせにて」も、艶情の花が咲くという。言わば枯木にも花が咲くという生氣が流露しているというのである。「さぶらふ人をくらべていとまむには」「かならずしもかれはまさらじ」とするも、齋院のすぐれて文学的環境には羨望の情がうかがえるのであり、それは先に式部が提示した中将の君の書簡の内容をうわまわつて、いっそう敷衍した詳細な齋院讚美論では

ないか。

そのことは、「されど、うちわたりにて」以下、中宮御所の気風を述べることでいっそう明確となる。「ましろひ給ふ女御きさいおはせず」——既に皇后定子は崩じ、彰子の後宮は競争者なきための精神のゆるみがあることを述べるのだ。男も女もしごくのんきであつて、ここには精神の快き緊張がすっかり出す活気がないという。

中宮は「色めかしきをは、いとあはあはしとおぼしめいたれば」と中宮方弁護風の筆緻で、「すこしよろしからむと思ふ人は、おぼるげにて出で侍らず」とそういう態度を称揚するかのようであるが、それならそういう方向で徹底すればよいはずにもかかわらず、すぐその口の下で、「心やすく、もの恥せず、とあらむかからむの名をも惜しまぬ人」とおとしめつつも、「はたことなる心ばせのおるもなくやは」と、風流、艶情の点で対抗的言辭を弄するのは、齋院方の風流、艶情の世界の優越性が気にかかっている証拠である。

そうした中宮方の心浅き女房が表に出るから、中宮方は劣っているように見られるなどと述べつつも、すぐつづけて、上臈中臈の引つ込み思案のすぎることを批判して「さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見侍り」と、きわめて痛烈な言辭を用いている。

表に出る女房の心浅さを言い、また一方で、引込思案の上臈、中臈を批難する、まことに屈折した文章であるが、この痛烈な言辭から推していずれに式部の真意があるか明らかであろう。ただ一面的に一概に言わないだけのことである。「人はみなとりどりにて、こよなう劣りまさることも侍らず。そのこと敏ければ、かのことおくれなぞぞ侍るめるかし」は、式部のそうした思考の特質を表わして

いること言うまでもない。

「されど若人だに、重りかならむとまめたち侍るめる世に、見ぐるしうざれ侍らむも、いとかたはならむ」は、「かくえりて侍るやうなれど」という逆接に呼応して展開したところの、一概に言うべきでないという論理につづけて、逆態の論理へと傾斜していったもので、論理的必然をたどっている。そしてそれは、前に「上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りざうずめきてのみ侍るめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見侍り」という文章とは全く逆の趣意を述べたもので、矛盾する二面的な論理と言わねばならないであろう。が、しかし、ここは、式部が、そうした二面的な人生の論理を述べたということなのであろうか。人生の相対的なることをいう式部の論理を、わたくしたちは感心しておればよいのであろうか。感心し、感服し、礼讃することはよい。しかし、この文章の趣意は、そうした人生の、人間一般の、あるいは当世についての、式部の見解にあるのではない。それは、前に述べた「上臈中臈のほどぞ、……(略)……見ぐるしとも見侍り」という自己の見解のあまりに痛烈に言い過ぎたことを緩和しようための補足である。つまり、言うならば心理的修正にすぎない。「ただおほかたを、いとかく情なからずもがなと見侍る」と結ぶ文によって、式部は、式部の痛烈な主張に回帰する。この文は痛烈な彼女の主張のためおしというべき強さを示すものである。「ただ……」と、ほんのちよっぴりつけ加えるような、いで彼女の真意を深々とのぞかせている。

なお、「かくえりて侍るやうなれど」は、齋院の中侍の行為をいうものと解するが、すると、式部は、自分自身が中宮方を批判して

おきながら、批評の主を中将に転移させているということになる。いつのまにか批評の主を自分から中将にすりかえてしまっているのである。そして、それに対する反駁を行なっているわけである。批判の主も反駁の主も式部同一人で、一人二役のお芝居を演出しているのがこれすなわち式部なのである。一人三役というべきか。というより、すべて式部のからくり、というべき文体である。船晦から生まれた文体なのである。論理をひとすじにおしていかない、船晦の文体は、中宮御所批判の筆鋒を、そうしたくらし、(船晦)によって、やわらげた印象にしようとする表現心理によるものである。

次の節で、式部は、こうした中宮御所の気風の因由、由来を考察している。

式部はそれを中宮の内気、(「あまり物づつみせさせ給へる御心」、無難主義(「ただことなる咎なくて過ぐすを、ただめやすきことにおぼしたる御けしき」)にあると洞察し、子供っぽい、頼りない女房たちがこの中宮に迎合しているうちに、こういう気風になってしまったのだ、と論破している。

これはきわめて卒直な中宮彰子その人への批判であると言わねばならない。彰子の消極性を鋭くついでているわけである。中宮彰子が積極的にリーダーシップをとる人でなかったことへの批判であると書いてよい。

「齋院に、中将の君といふ人侍るなり」以下の長大な文章は、このあたりにきて、はっきりと式部の表現意図を表にさし出しているようである。

中宮自身も「ことをかきしことなし」という殿上人たちの風評

を知って、気風是正の要を口にするのだが、「そのならひなほりがたく」と言うあたり、まことに卒直である。「ただごとをも聞きよせ、うちいひ、もしはをかきしことをもいひかけられて、いらへ恥なからずすべき人なむ、よに難くなりたるぞ、人々はいひ侍るめる。みづからえ見侍らぬことなれば、え知らずかし」と式部は書く。彰子の後宮の、風雅・機知といった精神の欠如を、式部は不満をこめてつづっているのだ。「人々はいひ侍るめる」とは、そのことへの世評なることを言うことによって、自己の見解を世評という客観性にゆだねることによって、船晦したもののである。「みづからえ見侍らぬことなれば、え知らずかし」にいたっては、まさに、船晦もきままれり、というところである。しかし、式部の真意は、船晦の筆によって、かえって明らかに察せられるのである。

「かならず人の立ちより……」以下、「……よきほどにをりをりの有様にしたがひて、用ゐむことの、いと難きなるべし」は、例の、式部の、物事を一面的に見てはならじとする一般論であって、補足的な意味しかないであろう。これらの一般論は、つねに式部の強い主張を緩和するはたらきをし、式部の真意の所在をともしればくらませる。わたくしたちは、こうした一般論の、論としての妥当性や卓越性に感心したりしすぎて、式部の主張を見うしなっているのではない。

式部の述べようとすることは、風雅なことを話しかけられて、応答を恥ずかしくない程度にできる人が全く少なくなりましたと殿上人たちが批評する中宮方の女房の気風である。その具体例を「まづは、宮の大夫まゐり給ひて……」以下に述べるのであり、「いとあえかに児めい給ふ土蔵たちは、対面し給ふこと難し。ま

た、あひても何事をか、はかばかしくのたまふべくも見えず。……
……」と述べて、上臈の女房たちの子供っぼさはまるで姫君時代のま
まで、女房としての宮仕えの自覚がない、と批判を加えるのであ
る。藤原齋信など高官が、対面する女房もいまま帰ってしまうと
いうようなおぼさまなことまでであるという。これでは「この宮わたり
のこと『埋れたり』などいふべかめるも、ことわりに侍る」と言わ
ざるを得ないのであった。

「齋院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし」とは、まこ
とに素直に中宮方の欠点を是認したものである。

つづけて、「さり」とて、……以下、齋院の中將の書簡の内容が
あまりにひどいそしりようであることについて批判の筆をとるの
は、冒頭の文章と対応して、齋院の中將の書簡内容に対する反撥のた
てまえで結んだもの以外のなものでもない。これまで見てきたこ
とき長大な文章にわたる中宮御所批判の内容のあとに、このように
付されても、わたくしたちとしては、全く形態的なため、まえを整え
たものだという印象を受けるのみである。

最後の「いと御覽せさせまほしう侍りし文書きかな。人の隠しおき
たりけるをぬすみて、みそかに見せて、とりかへし侍りにしかば、ね
たうこそ」は、以上の文章が、あくまで書簡に対する反撥に発したも
の以外でないことを強調し、読者に印象づけようとするのであろう。

齋院方の中宮方批判を是認するかと思えば、齋院方へはげしく反
撥するといつたぐあいに屈折する文章は、双方を公正に批判してい
るようの一見、見うけられるようであるが、以上見てきたごとく、式
部の真の意図は、中宮御所批判にあること明らかであり、式部の、
後宮生活に対する生活感情を、見てとることができるのである。

よく言われている式部の内省的な批判精神、いわゆる自己批判、
内省のきびしき、ということこそ、蓋然的にふりまわしてはならな
い。この文章の具体に即するとき、批判は他に対するものであつ
て、自己に対するものではなかったこと、前述の分析によって明ら
かである。

いわゆる消息文体と呼ばれる部分全体、殊にも和泉式部、清少納
言らに対する痛烈な批判は、他に対する批判であつて、自己に対す
る批判ではない。同じカテゴリーにぞくするこの段がなぜ式部の自
己批判といった従来の一般の見解でおおわれなくてはならないか。
この段の分析からだけでなく、こうした点からも、これは普通の意
味での批判（他への批判）の文章だと考えるのが妥当であらうと思
われる。

紫式部の孤愁の情は、日記全体にわたって浮彫りすることが可能
であるし、しなくてはならない。また、日記のみならず歌集（紫式
部集）にも求められなければならない。本稿では、従来の読みとり
方への異見をふくむ読みをも示すべく、また、後宮生活の中核とし
て彰子の後宮の氣風への批判、不満ということを重視する観点か
ら、「齋院に、中將の君といふ人侍るめり」以下の文章の分析を行
なったわけである。

日記的部分の内省的な表現世界に注目することから、その内在す
る具体的世界を、日記自体から浮かびあがらせようとする試みでも
あったが、機会を得て続稿へつなげなければならない。本稿は一往これ
で擱筆することとした。

注1 阿部秋生博士「源氏物語研究序説上」四九三頁。

注2 益田勝美氏「紫式部日記の新展望」(「平安日記」八国語園文学研究史大成5V所収)。秋山虔氏「紫式部の思考と文体」(「源氏物語の世界」八東大出版会V所収)。

注3 清水好子氏「紫式部論」(「日本文学」八昭和36年7月V)

注4 拙稿「紫式部の宮仕え生活と源氏物語」(「甲南女子大学研究紀要第1号」)

(甲南女子大学講師)